漢語と和語

2006.06.06～2009.05.16更新

漢語（もろこしのことば）はの字音〔中国音〕には、呉音・漢音・唐宋音と異なった時期に日本に伝わった字音があります。さらに、室町時代の頃から混種語〔重箱読み・湯桶読み〕が用いられ始め、実に複雑な音の形態として今日、「日本語」のなかに引き継いできています。

和語は「やまとことば」と呼ばれ、古来日本で用いられていたことばです。現在の日本語にもこのことば群は、私たちの日々の暮らしのなかに脈々と受け継がれ生きづいています。

日本語の和語（やまとことば）を学習するとき、こんなことに疑問を抱き考えていくのに最良の題材として室町時代の「狂言」のひとつ「舟船」を紹介したいと思います。水の上を人が渡る方法・手段として用いる乗り物の名ですが、漢字で書きますと「舟」と「船・舩、舡」と書き分けをします。漢語では「舟船」と熟語して、訓みは「シュウセン」と読みます。この訓みは聴き慣れないかもしれませんが、小学館『日本国語大辞典』第二版を繙きますと、ちゃんと見出し語に収載されていることばなのです。

日本の文献資料の用例としては、『明衡往来』（一一世紀中頃）下末に、「具表二微志一、而舟船遅來、自以懈怠」。『海道記』（一二二三年頃）竹の下より逆川「棹哥數聲、舟船を名月峡の口によせ松琴万曲琵琶を尋陽江の汀にきく」。『日葡辞書』（一六〇三-〇四年）「Xu<xen（シュウセン）。フネフネ」。『星巌集』-乙集（一八三七年）西征集四・普賢洋遇大風「怒濤屹立天中央、奪二我舟船一当二箕箒一」。『西京繁昌記』（一八七七年）〈増山守正〉初・上「人物舟船動揺の状態を観望せしむる者、又一層の妙工美観といふ

べし」とし、さらには中国漢籍『後漢書』-袁紹傳「益作二舟船一、繕二修器械一」を引用しています。

次に、和語（やまとことば）の読み方を見ますに、上記狂言の題名にありますように「ふね」と「ふな」の両用の読み方があることに気づかされます。そこで、最初の疑問です。どのような場合に「ふね」と云い、どのような場合に「ふな」と日本語では表現しているのでしょうか？

大蔵流狂言には「舟船（ふねふな）」と表現されてます。

●大蔵流 狂言「舟船」★日下部禮蔵●金春流 能「鵺」★櫻間金記●国立能楽堂　東京都渋谷区千駄ケ谷4-18-1★国立劇場チケットセンター（10時～17時）　0570-07-9900（4/1～）　03-3230-3000（PHS）という演目にありますので、是非、お出かけになってみてはと思います。

狂言関係の書籍

舟船（ふねふな）

シテ　太郎冠者　　狂言上下・着付 - 縞熨斗目
アド　主　　長上下・着付 - 段熨斗目・小サ刀

主これはこのあたりに住まい致す者でござる。この間（あいだ）は久（ひさ）しゅういずかたへも出ねば、心が屈（くツ）して惡（あ）しゅうござるによって、今日（こんにツタ）はどれへぞ、遊山（ゆさん）に參ろうと存ずる。まず太郎冠者を呼び出（い）だいて談合（だんこう）致そう。ヤイヤイ太郎冠者あるかやい。太郎冠者ハアー。主いたか。太郎冠者お前（まえ）におりまする。主念無（ねんの）う早かった。汝を呼び出だすは別なることでもない。この間は久しゅういずかたへも出ねば、心が屈して惡しいによって、きょうはどれへぞ、遊山に行こうと思うが何とあろうぞ。太郎冠者御意（ぎョい）なくは申し上ぎょうと存ずるところに、これは一段とようござりましょう。主さりながら、この

あたりはおおかた見盡くいたによって、きょうはどれへぞ、珍しい所へ行きたいものじゃ。
太郎冠者まことにこのあたりは、おおかた御見物なされましたによって、今日はどれへぞ珍しい所へ、お供致したいものでござる。主汝分別をしてみよ。太郎冠者畏ってござる。どこもとがようござりましょうぞ。主どこもとがよかろうぞ。太郎冠者イヤ、西の宮へお供致しましょう。主その西の宮という所は景のよい所か。太郎冠者つっと面白い所でござる。主それならばおっつけて行こう。太郎冠者ようござりましょう。主汝は供をせい。太郎冠者心得ました。

主サアサア來い來い。太郎冠者参りまする参りまする。主さてその西の宮という所は、景のよい所か。太郎冠者浦山をかけてござれば、浦で網を引かせらりょうと、山で狩をなさりょうと、おぼしめすままの所でござる。主それは一段の所じゃ。イヤ、來るほどに、大きな川へ出た。これは何という川じゃ。太郎冠者こなたはこの川を御存じござらぬか。主イイヤ何とも知らぬ。太郎冠者これは神崎の渡しと申して、かくれもない大河でござる。主ハハア神崎の渡しというはこの川のことか。太郎冠者さようでござる。主して乗る物でもあるか、ただし かち渡りか。太郎冠者いつもこのあたりに乗る物がござる。行て見て参りましょう。主早う見て來い。太郎冠者畏ってござる。

太郎冠者いつもこのあたりに、乗る物があるが、きょうは何として見えぬことじゃ知らぬ。イヤ、つっと向こうに見ゆる。急いで呼ぼう。ホーイ、ホーイ、ふなやい。ホーイ、ふなやい。ホーイ。主ヤイヤイ太郎冠者。ふなと言うては來ぬほどに、ふねと言うて呼べ。太郎冠者こなたの御存じないことでござる。私にまかせておかせられい。主これはいかなこと。太郎冠者ホーイ、ふなやい。ホーイ、ふなやい。ホーイ。主ヤイヤイ、ヤイ太郎冠者。太郎冠者何事でござる。主ふなと言うては來ぬほどに、ふねと言うて呼べと言うに。太郎冠者私の前ではようござるが、おのおのの前でそのようなことを仰せられたならば、恥をかかせらりょう。主何と恥をかこうとは。太郎冠者古歌にもふなとこそござれ、ふねとはござりますまい。

主推参な。汝が分として古歌だてを言いおる。さりながら古歌にあらば詠め。太郎冠者畏ってござる。「ふな出して、跡はいつしか遠ざかる、須磨の上野に秋風ぞ吹く」。何とふなではござらぬか。主それはさだめてふねでかなあろう。太郎冠者こなたの分として、この古歌を直させらるることは成りますまい。主それならば某が方には、ふねと詠うだ古歌がある。太郎冠者あらば早う詠ませられい。主心得た。「ほのぼのと、明石の浦の朝霧に、島がくれゆくふねをしぞ思う」。何とふねではないか。太郎冠者それはさだめてふなでかなござりましょう。主汝が分として古歌を直すことは成るまい。太郎冠者私の方にはまだござる。主あらば早う詠め。太郎冠者畏ってござる。「ふな人は、誰を戀うとか大島の、浦かなしげに聲の聞うる」。何とふなではござらぬか。主それもさだめてふねでかなあろう。太郎冠者こなたの分として、古歌を直させらるることは成りますまい。主某が方にはまだある。太郎冠者あらば詠ませられい。主さりながら、今度はちと早う詠まねばならぬ。太郎冠者早うなりと遲うなりと詠ませられい。主心得た。「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆくふねをしぞ思う」。何とふねではないか。太郎冠者さては、こなたのことでござる。主何とこなたのこととは。太郎冠者「褻にも晴れにも歌一首」と申すが、それは最前の歌でござる。主最前のと歌は一つなれども、最前のは人丸の歌、今のは猿丸大夫の早歌というて、作者が違うてあるいやい。太郎冠者いかに作者が違うても、歌は一つでござる。それまでもないこと。あなたの着き場と、こなたの着き場は何と申す。主それはふふ、ふね着きよ。太郎冠者ふな着きとこそござれ、ふね着きとはござりますまい。その上私の方にはまだござる。主あらば早う詠め。太郎冠者心得ました。「ふなきおう、堀江の川のみなぎわに、來居つつ鳴くは都鳥かも」。何とふなではござらぬか。主まずそれに待て。太郎冠者畏ってござる。

主これはいかなこと。太郎冠者といらざる古歌穿鑿を致いてほうど詰まった。
何と致そう。イヤ、謠で詰みょうと存ずる。

主ヤイヤイ太郎冠者。某が方には、ふねと謡う謡があるが、汝が方にもあるか。太郎冠者こなたの方にござれば、私の方にもござる。あらば早う謡わせられい。主心得た。〔山田矢走の渡し舟の、夜は通う人なくとも、

太郎冠者イヤ、一段のことを謡い出だされた。あとで詰みようと存ずる。

主〔月の誘わばおのずから、ふねもこがれて出ずらん、ふ。太郎冠者のう主殿。主何と。太郎冠者〔ふな人もこがれ出ずらん。主なんでもないこと、しさりおれ。太郎冠者ハアー。

主エーイ。太郎冠者ハアー。〔大系本一四七頁〕

現代人は、船舶を利用して「船旅」をしたり、内海をクルージングして「船遊び」するということが余りしなくなっています。また昔は、川を渡るとき、渡し場から「渡し船」に乗りました。長く乗っていますと、「車酔い」ではなく「船酔い」に出遭します。「船部屋」で横になるか「船縁」に出るか、波に揺られて「波乗り船」には逆らえません。時には「船荷」を積載してますから、「荷船」は荷の上げ下ろしにてんやわんやします。大きいも小さいも「造り船」は、「船大工」が造ります。材料は木材であれば、「木船・木舟」と呼び、石材であれば、「岩舟・岩船・磐船」と呼び、鉄材であれば「黒船」「鉄船」と呼びます。これを動かす人を「船乗り」「舟守」「船方」と。この束ね役が「船長」で日録をすれば「船長日記」、これを役人が管理して「船奉行」、「船賃」を支払うお客は「船人」です。彼らが使う道具の総称を「船具」と字音読みし、「船道具」類に「船舵」「船梯子」「船碇」「船筏」「船時計」等々。見るとおわかりでしょうか。「船」の語字が前にあって次に繋がる語字があるときは、「ふな○○」と読んでいます。逆に、前に修飾する語字があれば「○○ふね」と読んでいます。ここまでは、まずまず順調でしたが、この文字を用いた地名には曲者が潜んでいます。神奈川県に「大船」と書いて「大船」

と読む地名があります。東海道線の駅名「大船駅」にもなっています。岩手県の南端にある「大船渡」のように「渡」の語字があれば良いのでしょうが……。脱落・省略語のある地名なのでしょうか。他は京都の地名「貴船」、人の苗字にも「三船」「入船」。正月には寝枕にはさむ「宝船」のお札のように「ふね」であるのにです。「大船」は、別の「ふな」という字語、例えば「鮒」（魚名）の宛字かとも考えたくもなります。

※末尾が「な」であったり、「ね」であったりする語を検索するときに、各種の『逆引き辞典』を利用なさると便利でしょう。因みに、ひとつ手元にある大修館『日本語逆引き辞典』〔大修館書店刊〕で、この「ね」と「な」の語を眺めてみますに、「な」は、「ふな【鮒】」の語彙しか見えていません。これとは逆に、「ね」は「ふね【船】」の語彙数十例が見えています。一部列挙しておきましょう。

のりあいぶね【乗合船】
うかいぶね【鵜飼舟】
トカイぶね【渡海船】
もやいぶね【舫い船】
かよいぶね【通い船】
ショウリョウぶね【精霊舟】
トウロウぶね【灯籠舟】
おぶね【小舟】
おおぶね【大船】
うつおぶね【空舟】
さかぶね【酒槽】
べかぶね【べか舟】
うきふね【浮舟】
かきぶね【牡蠣船】
つなぎぶね【繋舟】
ひきふね【引き舟】
まるきぶね【丸木舟】
かがりぶね【篝舟】
もかりぶね【藻刈舟】
くりぶね【刳船】
おしおくりぶね【押送船】
いさりぶね【漁船】
にたりぶね【荷足船】
つりぶね【釣船】
くろぶね【黒船】
かわぶね【川船】
ごしゅいんぶね【御朱印船】

といった語彙群がここには所載されています。

次に、この「ne」と「na」についての応用編に移りましょう。日本国の地名や姓名・人名には、不可解な読み方をすることばが幾つもあります。

一　姓名における和語と漢語

A　「ね(ne)」と「な(na)」※非変化語「あね【姉】」「みね【峰・峯】」

【米】「よね」と「よな」　米虫・米石

【舟】「ふね」と「ふな」　船藤・船藤。

【稲】「いね」と「いな」　稲村・稲田・稲城・稲山・

【金】「かね」と「かな」　金親・金原・金作・金持・金集・金棒。

金城・金城キンジョウ、金田一・金田一、金重・金重、金讃・金讃

【胸】「むね」と「むな」　胸形・胸像。

【宗】「むね」と「むな」　宗岳ソウガ・宗像・宗象・宗形・宗方。

【棟】「むね」と「むな」　棟居。

【棟】「みね」と「むな」　棟。

【米】「こめ」…「よね」と「よな」〔「マイ・ベイ」〕米野・米沢・米子・米内・下斗米・苫米地・米良・米餅搗・錦米。

B　「め(me)」と「ま(ma)」

【雨】「あめ」と「あま」　雨宮・雨宮。

C　「ゑ(we)」と「わ(wa)」

【聲】「こえ」と「こわ」

D　「ぜ(ze)」と「ざ(za)」

【風】「かぜ」と「かざ」　風神・風吉。

風袋・風袋

E　「け(ke)」と「か(ka)」

【酒】「さけ」と「さか」　酒・酒井。

【竹】「たけ」と「たか」　竹田・竹山・竹野・竹村・竹井。

二　人名における和語と漢語

この名前は、実際に存在している人の名前です。「籠谷」が苗字で、名を「懿俯拾仰」で「つきようりうのひろみつ」と読むのだそうです。これでは、和漢混合読みやもしれません。この反対に、簡潔な名前「一」縦棒一本で、「すすむ」〔どこまでも一直線にススムの意〕と読むのですから実に人の名も面白いのです。兄弟姉妹「一」「一」「丶」「〇」「丨」と云うわけです。名前は戸籍簿に記録されますので、その届け出が誤って記載される例もありました。「一不」と命名され、届け出したときに「不」をくずし字であったが故に、「子」と誤表記され「一子」で「かずお」と読むことになったというのです。

人名のなかで最も長い名前と云えば、落語「壽限無の長助」、これと列ぶ女人の名前として、無住の『沙石集』巻第八に、「阿釋妙觀地白熊日羽嶽」が知られています。次に挙げてみましょう。

（一三）尼公ノ名事

或山寺ヘ、女人行テ出家シテケリ。出家ノ師ノ僧、「法ノ名ヲ付マヒラセム」ト云ヘバ、「名ハ先ヨ

リ案ジテ付テ候」トゾ云ケル。「イカニ」ト問ヘバ、「佛ヲモ、神ヲモ、アマタ信ジマイラセテ候歟、イヅレモタウトキ侭ニ、彼文字ヲ一ヅヽ取アツメテ、阿釋妙觀地白熊日羽嶽房ト付テ候也。阿彌陀・釋迦・妙法・觀音・地藏・白山・熊野・日吉・羽黒・御嶽、コノ御名ノナツカシ〔ク〕候テ」トゾ云ケル。餘ニ長クコソヲボユレ。

というものです。これは法名ですから、字音で読むのが正しいのでしょう。

その他

漢字で示された名刺やメモ・名簿などを見てその読み方を即座に判断して言えないという経験をお持ちの方も多いことと思います。私が知っている苗字では、

「笛吹」さん。

「卒宮古」（沖縄県）

といった苗字の方が居ります。

《補助資料》京都女子大学（元武庫川女子大学）の西崎　亨先生から以下の「字音」項目の事例を戴きました。「感謝!!」

※漱石の小説『三四郎』は「サン」なのに、「さぶちゃん」こと「北島三郎」はなぜ「三郎」か？→「sam」と「sab」字音相通語にあり、もともとは「samro」が「sabro」となった経緯を見ることが可能です。因みに、日本人の氏名で「佐藤三郎」という名の御仁は数多く存在しているのです。

三　地名に於ける和語と漢語は如何なっているのだろうか

地名に於ける和語と漢語は如何なっているのだろうか地名・人名には、「n」音をラ行音で表記する用例が見えます。

※「伊干我」〔音の万葉仮名〕→兵庫県「鵤寺」出土木簡遺跡。

※地名・人名の「飛鳥」と「あさか」…「朝霞」「浅香」「麻香」「朝香」「阿坂」「浅賀」「朝賀」「麻賀」「淺香」「朝加」「安積」「阿阪」「淺賀」「愛栄」…「葦鹿」（あし＋しか）、「あせか」×、「あそか」×。

※１「信楽」は元の字音は、「シンラク」であり、「しならき」「しにらき」と古くは発音していたのではなかろうか？

※２「敦賀」も字音読みは「トンガ」であり、漢和辞書『大字典』で「敦」の文字を繙くと、漢音呉音ともに「トン」他に「タイ／テ」「タン／ダン」「テウ」「タイ」「タウ／ダウ」「チウ／ヂユ」「トン／ドン」「シユン」の音が掲載されています。ここで「ツンガ」を「つるが」と表記したとすれば、この字音に「ツン」の字音があったことになります。

※３「播磨」は、字音読み「ハンマ」であり、これが「ハリマ」となるから、和訓読みではないことになります。

※４「男信」〔長野県地名〕は字音「ナンシン(namshin)」→ワープロソフトで「なましな」と入力し、これを漢字に変換を試みるに変換されない〔「なましな」を漢字変換してみよう！〕。でも、「都祁」「平郡」〔奈良県地名〕や「留辺蘂」〔北海道地名「アイヌ語系」〕「連索」〔東京都三鷹市地名〕などは透かさず漢字に変換されて出力できるから妙に不思議な感じがしない訣ではない。でも、もうお氣づきであろうか？古代地名語の読みを綴る漢字は諸国郡郷の読み名の方が前で、此に漢字を後から宛てていく作業

がなされたことを……。であれば、古代語とは、基本となる日本語以前の別言語系統の語も顰めているに他なりません。世界地図で「アスカ」「アサカ」「アショカ」などと発音する地名圏を点で結び考察するとこの本當の意味が見えてくるのではと考えています。私が出会ったインドの人に「アショカ」さんという方が居りました。

四　用語としてみる和語と漢語

作家で英文学者の丸谷才一さんは、「字音語考」〔『桜もさよならも日本語』昭和六十一（一九八六）年、新潮社刊〕の冒頭部分で、

剣術の用語はたいてい和語である。たとへば、
構へ　足さばき　素振り　払ひ業　かつぎ業　返し業　すり上げ業　竹刀　突き
なんて調子だ。もちろんなかには「面」とか「胴」とか漢語もあるけど、これは至ってすくない。
ところが野球用語は圧倒的に漢語（字音語）が多い。
内野　外野　投手　打者　三振　四球　安打　盗塁　走塁妨害　暴投　本塁打
といふ調子で、枚挙にいとまがない。和語の野球用語はせいぜい、
すべり込み　空振り　押し出し　さよなら勝ち
くらゐのものではないか

この一連の内容を指摘した大元を次に示しています。中田祝夫編『日本の漢字』〔中央公論社刊「日本語の世界」４〕だと……、「すっかり感心したものだ」と書いています。この要因は何かと云えば、「この対比により、漢語の多用は実は明治以後の現象で、明治維新以前は和語で用をすませてゐたこと

を、じつにわかりやすく示してくれた」〔10頁③④〕という事実の検証でしょう。日本人はどうも正（プラス）のイメージと負（マイナス）のイメージとを具象表現するのに常にこの漢語と和語とを用いて区別して表現する格付け意識を根付かせてきたということなのです。これが明治維新になると、西欧語が怒濤のように流入して来ました。この最新の洋語が品格の最上級語として用いられるのです。丸谷才一さんと日本語相談で親交が深かった学習院大学名誉教授の大野晋さんが、このことを「アイディア」と云うと内容のあることをきちんと考えたように思い、漢語で「着想」と云えばそれに継ぐ位の貫禄なのに、和語で「思ひつき」と云うとひどく詰まらぬことを軽薄に思っただけのやうに聞こえる」と指摘していることを述べています。この三種語の格付けこそが日本人の日本語意識にどっかと根を下ろしているのです。明治六年の雑誌「明六雑誌」を見ると、洋語の新造語である漢語が溢れ出します。例えば、英語「パーラメント」が漢語で「議会」和語で「はかりのつどひ」式に「鉄道」が「くろがねのみち」。「病院」が「やまひのいへ」。「憲法」が「おきてののり」という具合にです。この一見厳かな漢語は、ものごとがテキパキと運ぶので至って調法がられる反面、現実の暮らしには遠く隔離し、空疎な脅しをかけることになりがちになってしまう傾向があるのです。昭和を代表する谷崎潤一郎は、『文章読本』で綴ります。地方旅館の番頭が客に挨拶するなかで、何度も「ヘイカンでは」と表現する。漢語「弊館」より「手前ども」でよかろうと…。日常の主客会話では、

社会→世の中　　徴候→きざし　　予覚→虫の知らせ　　尖端→切っ先・出っ鼻

でと云うのです。この手の漢語表現で云えば皇室用語に「セッケン」と言うことばがありますが、「接見」か「席捲・席巻」かと頭のなかで思い悩み、「セッケンを給わります」となったら、「石鹸」を戴けるのかと思い描いてしまうこともありましょう。「お目通りなされます」の方が親しみを感じるのも格付けという関係ならではのことでしょう。ある意味で漢語は視覚性の強い、きついことばということ

でしょう。

「受取拒否(受け取れません)」「必着(…までにお願いします)」「御利用(お乗りくさいまして…)」

でありまして、身近な漢語と和語に思い巡らしてみては如何でしょうか……。現代文におけるその一例をここに示しておきましょう。

プロポーザル↓企画書↓目論見書↓くはだてのふみ

クォリティ・コントロール↓品質管理↓しなもののひのべ

これを見て、貴方はどう、思いますか？

五　中国と日本における漢字文化交流→参照

「梅」と「桜」、中国と日本を代表する花樹の名前です。「梅」は古語では「ムメ」と表記し、中国原産で奈良時代以前に渡来したといわれています。『万葉集』〔八世紀後〕巻五・八一八に「春されば まづ咲く宿の烏梅の花ひとり見つつや春日くらさむ〈山上憶良〉」と歌われ、「烏梅」と二文字で表記する。他に万葉仮名では「宇米」「有米」と表記されています。この時代「梅」の樹花は「桜」の樹花の歌を圧倒しています。字音「バイ」で「メ」も字音として、字音「メ」が変化した語〔南留別志・倭読要領・日本声母伝・ニッポン語の散歩石黒修〕という説もあります。また、当初「烏梅」として入って来たものか〔日本語原考＝与謝野寛・大言海・国語の中に於ける漢語の研究＝山田孝雄〕という説もあるのです。

この「梅」の文字を「楳」と書く人名の方がいました。漫画家楳図一夫さん、まだ、このくらいは序の口で、諸橋轍次編『大漢和辞典』全一三巻にない漢字を人名とされている方がいます。「髞」の字は、十二巻635頁45344番に音「ソウ」、訓「たかし」とあって確認できますが、東北仙台にに内ヶ崎贇五郎、

元参議院大谷贇雄。この「贇」の字は、十巻八〇〇頁36909番に「贇」となっているのですから読み方が異なっています。千葉大学名誉教授〔衛生学〕松村聿、この「聿」の字は、音「シュク」で九巻二四五頁29227番、さらに中国の『康熙字典』に「肅」＝「粛」の古字として採録されています。意味は、『曲禮』の「主人客をすすめて入る」に因み「すすむ」と読むのです。

こうした難字人名が後を絶たないので、やがて近代日本国ではその使用を制限してきました。実際に、漢字で書く人名には使わないという文字が幾つかありますので列挙しておきます。

酔婿殴嫁狂暴醜　拒寝怒争憎愚劣　苦悩死恐怖忘憂　濫飲脳髄陥睡眠　漏尿液失禁切恥
惑盲犬臭腐訴渇　毒殺卑匹尼窃匿　賄煮窯否騒汚朽　逃凶悪……など。

また、男性と女性の区別が判然としない「清・清」「優」「円」の字があります。「きよし」〔男・苗字〕、「きよ」〔女〕、「セイ」〔苗字〕、「すが」〔宮様名〕といった具合です。音や訓（多訓）でその人物が異なってきます。『宇治拾遺物語』に、小野篁が嵯峨天皇から出された「子子子子子子子子子子子子」の文字を音「シ」、訓「こ」「ね」の読みを以て「ねこのこねこ、シシのこのこシシ」と解読した話しが書かれています。これを現代人は洒落て「十二の子」、それなら「本俸より家族手当が多い」って解読してしまうのかもしれません。この洒落ですが、「金合金成月」〔金鎗魚・合歓木・金雀枝・老成者・五月蠅〕の一文字合成語です。

日本語の古い時代の漢語と和語を考察するときに目安となる文献資料の一つに『日本書紀』があります。当時の本邦が伝える史書として、どのくらいの漢語が用いられているのか？巻第十七の継体紀の文章を以て抜粋してみました。

天皇　五世　七世　顔容　妹妙　嫩色　別業　幼年　父王　遠離　桑梓　膝養　歸寧　壯大　豁如
男女　繼嗣　方今　天下　繫心　兵杖　夾衞　乘輿　奉迎　人主　迎兵　懼然　失色　山壑　元年
正月　辛酉　甲子　籌議　慈仁　孝順　天緒　慇懃　勸進　紹隆　帝業　妙簡　枝孫　賢者　丙寅
持節　法駕　肅整　容儀　警蹕　前駈　奄然　晏然　自若　踞坐　胡床　齊列　陪臣　帝坐　敬憚
傾心　委命　忠誠　意裏　奉遣　所以　本意　二日　三夜　喟然　懿哉　遣使　來告　取嗤　貴賤
及至　踐祚　寵待　甲申　行至　二月　辛卯　甲午　天子　鏡劔　璽符　再拜　子民　治國　重事
寡人　不才　不足　願請　回慮　伏地　固請　西向　南向　伏計　大王　臣等　宗廟　・稷　衆願
將相　諸臣　如故　職位　庚子　奏請　前王　宰世　維城　乾坤　掖庭　趺蕚　祖父　毎州　安置

《継続中》

日本語では、漢字熟語を構造の上から次の四種類に区分しています。

（1）上から下へ修飾して訓み下す。

（2）下から上へ却って

《継続中》